

同志社大学
2012年度 卒業論文

論題：家族関係と金銭感覚の相関
——家庭内における家族の相互作用および文化資本と、
子どもの消費行動の関係について——

社会学部社会学科
学籍番号：19091077
氏名：寺島 元子
指導教員：立木 茂雄

(本文の総文字数：21,465字)

目次

はじめに.....	1
第一章 人間の活動と経験に関する諸概念.....	2
1.1 ハビトゥス理論	
(1) 行為者の行動	
(2) ハビトゥスという概念	
(3) ハビトゥスの生成と行動の規定	
1.2 文化資本の世代間再生産	
(1) 文化資本とその3分類	
(2) 文化資本のサイクル	
1.3 消費態度と所得	
第二章 研究方法.....	7
2.1 研究対象の属性	
(1) 姉の属性と金銭感覚	
(2) 弟の属性と金銭感覚	
(3) 姉弟の属性の比較	
2.2 研究方法	
(1) 母親へのインタビュー	
(2) ピーナツ母娘としての母子関係	
(3) 弟の金銭感覚と父親との関係	
第三章 考察.....	16
3.1 母娘における消費傾向の再生産プロセス	
3.2 父息子における金銭観の継承プロセス	
3.3 総括	
おわりに.....	20
参考文献	

はじめに

われわれは毎日、コンビニエンス・ストアに行けば軽食や雑誌を買い、書店に行けば興味を惹かれた書籍を買い求め、ある目的地に向かう時にはバスやタクシーを使い、そのさいに運賃を支払う。あるいは、ブランドの服や鞆などの高額な商品を手に入れるために、貯蓄をし、節約に励むこともある。高校生や大学生は、手っ取り早くアルバイトをすることもかもしれない。日常生活のいたるところで、私たちは大なり小なりの金銭のやり取りを行なっている。

しかし、たとえ同一の商品を目の前にした時の、人々の商品に対する反応は、一様ではない。たとえば、友達と二人でショッピングに出かけたとしよう。ふたりはある一つの素敵なコートを見つけて、二人ともこのコートをいたく気に入ったとする。しかし、そのコートに対する二人の行動はもしかしたらまったく異なるものかもしれない。ある人は、自分の欲望のままにそのコートを買求めるだろう。現金が足りずにローンを組んでも買ってしまふ人もいるだろう。その一方で、商品の価格と利用価値に思いを巡らせ、結局購入をあきらめる人も存在する。懐に余裕があっても、あえて買わない人もいるかもしれない。

このように、ある特定の商品に対しての人の反応は多種多様である。そして、その行動は、その人自身が持つ独特の価値観に基づいて決定される。

本論で調査対象とした A 家庭でいえば、たとえば長女の A 子は、一度ほしいと思ったものに対しては何としても手に入れないと気が済まない性分であるから、一般的には「金銭感覚の緩い人間」であるといえる。一方で、血のつながった弟 B 男は、お金はむやみに使わずに貯めておき、無駄遣いを嫌い、めったに自分の財布を緩めない。A 子と B 男はどちらも一人暮らしの同じ大学生だが、月に使う生活費は総額で 5 万円ほど違うという。親から臨時にお小遣いを受け取る機会があるときも、A 子は遠慮なく嬉々として受け取るが、弟の B 男はかたくなに受け取ろうとしないという。そして二人とも受け取った場合、A 子は趣味にあつという間につき込んでしまふが、B 男は受け取ったほとんどの金額を、自分の銀行口座に貯金してしまう。

同じ血のつながった姉弟であっても、このように、金銭への欲望の度合いや使用方法に差が生じるのはなぜなのだろうか。同じ家族集団に属し、同じ年数を同じ親に育てられたにもかかわらず、月とスッポン程も金銭感覚は異なってしまう。筆者は、個人が遺伝的に継承した形質のほかに、姉弟間でこのような金銭への価値観の違いを生むものを、家族、特に両親との幼いころからの付き合い方や養育にかけられてきたお金の質や量、種類、そして母親と父親、それぞれとの紐帯の強弱に起因するのではないかと仮定した。この論文では、親から子供への、金銭教育の一環としての消費行動の継承プロセスを、家庭内での文化資本の流れと働きを通して論じていく。

第一章 人間の活動と経験に関する諸概念

1.1 ハビトゥス理論

(1) 行為者の行動

実際に人のとる行動というのは、その場での思いつきによるものでも、瞬間的な反応でもない。ピエール・ブルデューは、著書『リフレクシヴ・ソシオロジーへの招待——ブルデュー、社会学を語る』のなかで、人間の活動や行動の原理は、とある内在的な経済的理論にしたがっている言及した。そして、人間の実践的行動は、いわば実践的感覚という名の「勘」と、行為者の中に社会的に構築されたゲーム・センスの産物であるという。また、ブルデューは、人の行動そのものをゲームにたとえている。というのも、人がゲームを行うということは、その参加者が、ゲームで得られる「利益」に関心があるからである。そして、そのゲームで得られる利益は、一つの歴史的恣意性を持つものであり、さらに、断続的に繰り返されるような経験的観察を通じてしか知り得ない、歴史的構造物であるといえるのだ。(Bourdieu 1992=2007)

また、ブルデューによると、人はゲームのプレイヤーのように、自分が関心のある事柄、要は、その人にとっての〈利益〉を獲得するために、自身の持つ考えや価値観を規定していると思われる、社会の中の可視化された常識や、あるいは生きるうちに無意識にその行為者が受けてきた条件付けを、その時々で局面で作りかえたり、利用したりする。社会と人との間には、その人の経験により変化を続ける、このような相互作用が存在している(Bourdieu 1992=2007)。

(2) ハビトゥスという概念

さて、このような行為者の行動の原因を探るときに忘れてはならないのが、「ハビトゥス」の概念である。ピエール・ブルデューは、人間の活動が、力学的な原因効用最大化の自覚とはまた違う側面の原理によって規定されていると述べ、ハビトゥスについて以下のように記している。

実践の理は、この構築の原理が、…ハビトゥスという歴史的超越、実践によって獲得され、常に実践的機能に向かいながら構造化され、構造化するという性向という社会的に構築されたシステムに根拠をもっていることを想起させます。…しかし、ハビトゥス概念には、この構築作業が純粹に知的な作業とはまったく異なる…つまり、ハビトゥスは性向の体系の中に刻印された生成的（創造的とはいわぬまでも）な能力(Bourdieu 2000=2006 : 161)

である。ブルデューはさらに、ハビトゥスについてこう結論付けている。

ハビトゥスについて語るということは、個人的なもの、個性的なもの、そして主観的なものさえもが、社会的、集合的だと主張することなのです。ハビトゥスは社会化された主観性です。…合理性が制約されているのは、…人間の精神が社会的に制約され、社会的に構造化されているからなのです。個人はつねに好む好むまいと、…自分が押し付けられたか、訓練を受けたかにもとづくカテゴリーの制約にとらわれていきます。(Bourdieu 2000=2006 : 167)

人は、理性とはまた別の次元の内面的な構造をもっており、それによって彼らの行動は規定されていくのである。この、内面的な構造こそが「ハビトゥス」である。では、「ハビトゥス」は一体どのようにして、行為者の中で形成し、蓄積されていくのだろうか。

(3) ハビトゥスの生成と行動の規定

ハビトゥスとは、簡単にいえば、人々の日常経験において蓄積されていくが、個人にはそれと自覚されない知覚・思考・行為を生み出す性向のことである。人は、言葉として耳で得た情報や、経験した出来事、目で見た映像など、さまざまな外界からの刺激を自分の中に取り入れ、積み上げていく。これらはいわば、自分自身の歴史そのものであるといえる。ハビトゥスは、この歴史から生み出される内面的構造であり、そして社会化された主観であり、集団的ならび個人的な歴史の産物、自分自身の過去の軌道の足跡である。これらの経験から作りされた自分の歴史全体に基づいて、行為者は自分のとる行動を選び分けていくのである(Bourdieu 2000=2006)。

また、竹内洋は、ハビトゥスの性質について、行為者本人にも意識されにくい『心の習慣』のことであり、わかりやすい言葉で言い換えるならば〈肌〉とか〈気質〉とも訳せるものであるとした。そして、ハビトゥスは、家庭や学校での生活の中で、長い時間をかけて無意識的に形成されていく。この長期におよぶ連続的な経験は、自分自身のなかに蓄積され身体化された歴史となる。この身体化された歴史が、慣習行動の下地であるハビトゥスなのである。(竹内 1999) このようなハビトゥスは、後述する文化資本の世代間再生産のサイクルにおいて、子供が成長する過程において親から継承する〈文化資本〉を通して、社会集団の中で共有されていく。

また、行為者は、自分のまわりの社会構造の枠組みや、常識、そして、長期間で多岐にわたる条件付けのなかで、自分の性向や趣味、選好のぐあいを徐々に決定していく。そして行為者は、自身のとる行動が必ずしも合理的でなく、用いる手段がその行為で得られるメリット(利益)をたとえ最大限に伸ばすようなものもなく、また、その行為の裏に計算や明確な目的意識などがない場合でも、社会との相互作用で得られた自分自身の歴史に基づいて行動を決定する。

私たちは、たとえば「クラシック音楽が好き」、「週に海釣りに行くのが趣味である」と自分たちの嗜好を把握することができる。しかしそれは、実は、自分自身がそれを選んで

いる、というわけではない。その嗜好や性向はむしろ、私たちを生み出した「世界」と、それによって生み出された自分の持つ社会的現実—それはときに、まわりとの階級的な関係性であるかもしれない—に関連して決定されている部分が多い。私たちを包む社会空間こそが、私たちの思考を規則付け、行動の基盤となっていくのである。さらに言えば、ハビトゥスというのは「歴史に由来していながらも、相対的に不変で持続的」(Bourdieu 2000=2006)なものである。ハビトゥスは決して宿命的なものではなく、常に新しい経験の波に直面し、あらゆる周囲の影響を受け続ける。行為者のもつ性向は、持続させることは可能だが、決して決まりきった、不変のものではないのである。

以上のように、ブルデューは、人のもつ特有の行動や知覚—これを慣習行動という—は、外部からの働きかけ（社会的経験）の積み重ねによって決定されると言及した。このプロセスを分かりやすく図解すると、図1のようになる。

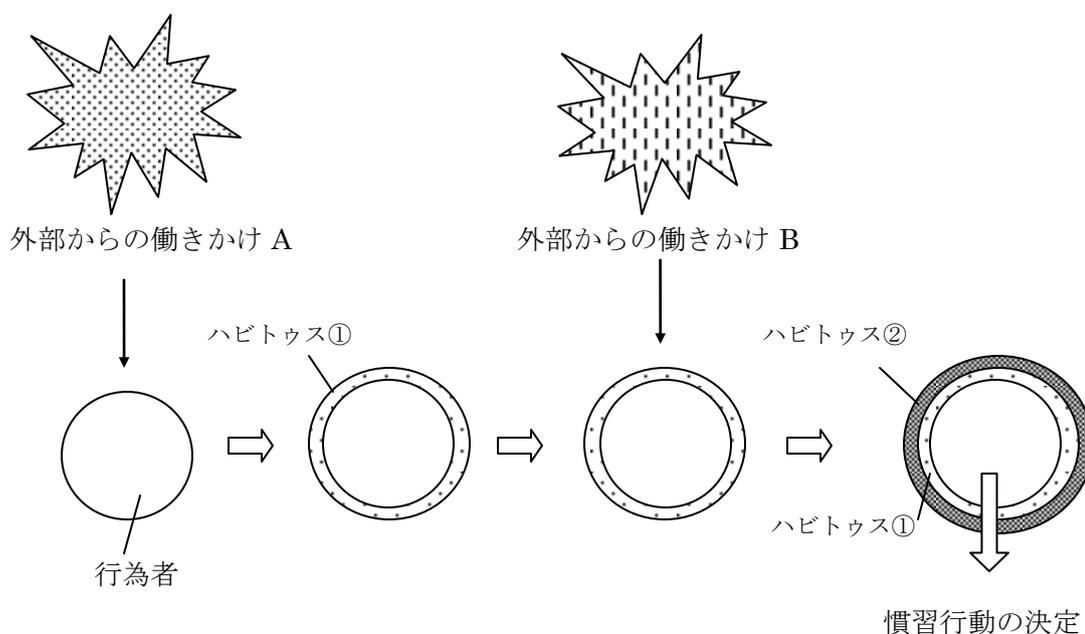


図1 慣習行動の獲得プロセス

また、社会の中で価値・利益があると思われる行動、あるいは、否定されると予想される行動とは何かを、社会が個人に指示し、個人がその要請を敏感に察知する、というプロセスそれ自体が、個人の引き起こす特定の行動の要因となる。

家族集団において、両親の持つ独自の金銭への価値観とそれに付随する行動は、それがよい側面であれ悪い側面であれ、子供の金銭観を形成するための社会的経験に、暗黙のうちに影響を与えるものだといえる。仮に、行為者の親が考えなし消費行動を起こしてしまうような、ルーズな金銭感覚の持ち主であった場合、家族社会の中で価値のある、あるいは、行為者の関心を引く考えや行動は「お金を使うこと」となる。子供は、親の持つそうした考えと行動を、家庭での金銭のやり取りや、その恩恵に預かることで、身を以て体験

し、自分の歴史の一部として蓄積されていく。たとえその行動が、ある人からは「お金をすぐに使ってしまうなんて、なんて堪え性のない行動だろうか」と思われるようなものでも、その消費行動の恩恵にあずかる子どもにとっては、「欲しいものを欲しいときに購入する」正しい消費行動として認識される可能性があるのである。そうして、親の持つ独特の金銭感覚は、子供にとって価値のある行動を決定していく。両親のどちらか一方がルーズで、もう片方が堅実な金銭感覚を持つ場合、子供はより自分とかかわりの深い親の影響を受け、自身の行動を決定することになるだろう。

1.2 文化資本

(1) 文化資本とその3分類

ブルデューは、自身の著書『再生産——教育・社会・文化』、そして『リフレクシブ・ソシオロジーへの招待——ブルデュー、社会学を語る』において、〈文化資本〉の概念についても言及を行っている。文化資本とは、ある知識(学歴)や技能、行動や立ち居振る舞いといった、個人の資質に関する金銭によるもの以外の個人的で文化的な資産を指す。そして、文化資本は〈身体化された文化資本〉、〈客体化された文化資本〉、そして〈制度化された文化資本〉の3つに分類することができる。〈身体化された文化資本〉とは、その場に応じた私たちの行動様式や、言葉遣い、立ち居振る舞いといった、文字どおり身体化され私たちの身にそなわっている文化資本のことである。次に、〈客体化された文化資本〉とは、絵画、書籍、映画…などといった私たちの目の前にもものとして現れる文化資本である。最後に、〈制度化された文化資本〉とは、学歴や卒業資格といった、形式化・制度化された文化資本を指す。この資本を獲得することで、獲得者は正当な文化への所属を認められる。

(2) 文化資本のサイクル

これら3つの形態の文化資本は、それぞれが独立したものではなく、複雑に絡み合いながら成立している。身体化された文化資本は、端的に言えば我々の行動そのものであるが、これは、長い時間をかけて客体化された文化資本に触れ、そして制度化された文化資本を獲得していくことで絶えず変化していく。また、客体化された文化資本は、制度化された文化資本を獲得して相応の社会的地位と経済を手に入れなければ潤沢に入手することは困難である。そして、これらの文化資本の獲得には「時間」や「金銭」といった経済資本が必要不可欠である。経済資本に余裕のある家庭の子供は、幼いころから獲得できる文化資本の量が必然的に大きくなり、ほかの子供よりも、その蓄積はスムーズになり、より有利に展開される。そうやって、子供たちは自分たちが得た文化資本を巧みに使い、社会の中で相応の地位と利益を獲得し、最終的にその社会構造は次の世代の子供に移動していくのである。(Bourdieu 1970=1991)

たとえば、クラシック音楽が好きな親の子供は、必然的に幼いころからクラシック音楽を聴いたり、あるいは親に連れられてコンサートにいたり、習い事としてピアノやバイオ

リンなどの楽器を習う機会が、ほかの家庭の子供よりも多くなる。このように、クラシック音楽に関する客体化された資本を多く得た子供は、音楽に興味を持ち、親と同様に愛好するようになる可能性が高い。さらに、そのような家庭の子供は、その嗜好によって音大に進む道や、音響に関係した職種に就きたいと考えるようになる可能性が高い。もちろん、このように、親の性向は、大なり小なり、その子供の性向や価値観に大きく影響を与えることになるのである。

以上、人の行動や立ち居振る舞いを規定するいくつかの要因についてみてきた。子供は、自分の周りの社会構造、とりわけ、自分と密接な関係にある「家族」という社会的空間で長期間過ごすことになる。この期間に、多岐にわたる領域において、親の行動や言動による濃厚な条件付けと独自の常識を獲得し、自分の性向を決定していく。そして、文化資本としての物や知識、そして価値観を、親の金銭感覚や文化資本の与え方、彼らとの関わりかたや言動、行動など、様々な要因に左右されながら獲得していく。さらに、家族という社会空間による条件付けによって得られる経験（歴史）の積み重ねによって、子供たちは、「なにを」、「どれだけ」、「どういった目的や頻度で」購入してもよいのかという独自の金銭感覚を、身体的な文化資本として育む。これが、子供の金銭感覚を規定するプロセスの一部である。

1.3 消費態度と所得

ジェームズ・S・デューゼンベリーは、その著書『所得・貯蓄・消費者行動の理論』の中で、消費は現在の所得と同時に、過去の所得にも依存すると説いた。より豊かで、高い生活水準や収入は、自分自身の持つ消費意欲および行動を大きくさせる。行為者の消費性向の大きさは、一般にその所得によって決定されるが、さらに言えば、その消費行動は現在の所得ばかりでなく、過去の所得の最高値に依存して決まる。というのも、長期的な経済の成長過程においては、現在行為者が持ちうる所得は、常に彼の最高所得となり、その最高所得は、断続的に存在する彼の過去の所得とも言えるのである。そして、成長しつつある経済の中では、この所得水準の高ければ高いものほど、その他の世帯よりも消費は増加し、そして、貯蓄への積極性が薄れていく。これが、デューゼンベリーの唱えた消費行動の習慣持続仮説である。(Duesenberry, J.S. 1949=1955)

デューゼンベリーの説を、親子関係に当てはめるならば、行為者である子どもにとっての「過去の所得」とは、すなわち親の経済資本および親から与えられる文化資本そのものであると考えられる。親の扶養下にある成長過程の子供には、自力で得られる所得は、ほぼ存在しないといっている。ブルデューによる文化資本の再生産の理論と同時に考えれば、家庭内で与えられる文化資本という名の子供の所得は、各家庭によって異なり、さらに、その所得たる文化資本の差が、その子供の性向や価値観といった消費行動（身体的文化資本）の礎になる。消費行動のハビトゥスは、親の経済力による文化資本（という過去の所得）の差によって決定される。

第二章 研究方法

2.1 研究対象

本論文の研究対象として、ある核家族の家庭 A の長女 A 子とその弟 B 男の金銭感覚の差異をとりあげる。なぜかという、A 子の持ちうる金銭感覚と B 男の持つそれとでは、同じ家庭に育った姉弟にもかかわらず、大きな食い違いを見せているためである。これはとても興味深いことである。そこで、まずは研究対象である A 子とその B 男の属性について触れていくことにする。また、彼らの母親を C 夫人、父親を D 氏と呼ぶことにする。

(1) 姉の属性と金銭感覚

まずは、A 子の属性と彼女の環境について触れる。姉である A 子は年齢 23 歳（現在の私立大学 4 回生の女性である。愛知県名古屋市にある、とあるベッド・タウン T で生まれ、現在まで引っ越しなどによる地域の移動は経験しておらず、大学入学を機に京都で一人暮らしをするまで、長年その土地に住み続けていた。家族構成は、会社員の父親 D 氏、専業主婦の母親 C 夫人、大学生と中学生の弟二人の 5 人で構成される核家族である。学歴については、小学校・中学校を地元の公立校で過ごしたあと、愛知県立の X 高等学校普通科に進み、その後、一年間の予備校での浪人期間を経て、2009 年 4 月に関西の私立大学に入学した。

家族内での形式的な所得に関しては、小遣いを小学校の 3 年生からからもらい、小学生時は 600 円/月、中学生時は 2,000 円/月、高校生時に 5,000 円/月に値上げされていった。習いごとは、幼稚園の時にエレクトーン、小学 1 年時から中学卒業までピアノ、そろばん、小学校の 3 年生から中学卒業まで英会話を習っていた。

また、A 子の金銭感覚および消費行動は非常にアクティブなものである。受け取った小遣いのほとんどは、月末までにきれいに消費される。その使い道はおもに、漫画、菓子、服、雑貨や小物といった嗜好品の類である。金銭の消費には肯定的であり、強い金銭の有効感覚をもつ。

(2) 弟の属性と金銭感覚

さて、つぎに弟 B 男の属性と環境について触れる。B 男は年齢 20 歳の大学 2 年生の男性である。彼もまた A 子と同様に、愛知県名古屋市にあるベッド・タウン T に生まれ、高校をし、大学進学のために上京するまで T 地域で生活をしている。家族構成は A 子と同様の 5 人核家族である。学歴については、小学校・中学校・高等学校の 12 年間、A 子と同じ学校に通う。その後、現役時の 2011 年に、東京都にある国立大学に入学し、親元を離れて一人暮らしを行っている。

家族内での形式的な所得に関しては、姉の A 子と同時期から、同様の金額を受け取り、

値上げの時期も同じである。また、習いごとは、小学校1年生から4年生までサッカーを、4年生から小学校卒業時まで空手を習っていた。また、姉と同様の期間に英会話とそろばんを習っていた。

B男の金銭感覚は非常に堅実かつ受動的なものである。親から支給されてきた小遣いは、1割ほど使った残りはすべて貯蓄に回しており、お年玉の類には一切手を付けない。また、嗜好品や利根的な浪費に対する嫌悪感が強く、そのような性質を持つ人間とのかかわりを積極的に避ける傾向がある。金銭に対しての有効感覚は懐疑的である。

(3) 姉弟の属性の比較

表1 属性と消費行動における比較

	姉 A 子	弟 B 男
年齢	23 歳	20 歳
地域	名古屋市にあるベット・タウン T から高校卒業まで移動なし	
学歴	私立 N 幼稚園 名古屋市立 Y 小学校 名古屋市立 T 中学校 愛知県立 X 高等学校 (普通科・留年なし)	
現時点の最終学歴	大学生	
現在の住居	京都	東京
定期的な小遣い	小学校 3 年～卒業 600 円 中学校 2,000 円 高校 5,000 円	
習い事	ピアノ、そろばん、英会話	サッカー (途中で空手に変更)、そろばん、英会話

表1のように、A家庭の子供の持つ属性は、定住地域とその年数、高等学校までの学歴、小遣い額など、ほぼ同一のものであり、遺伝的形質をのぞく属性の差異は性別、年齢以外にはあまり見受けられない。習いごとに関しても、内容の微妙な差こそあれ、拘束日数や習いごとの総数は同一である。このような似通った属性もつ中で、両者の金銭感覚とそれに付随する消費行動に関してはほぼ正反対の価値観を持っている。

本来、ある一つの家庭内で、親から与えられる文化資本は、子供にとって一様に同質的なものになるはずである。通常、家庭内で、親が子どもたちを意識的に差別しながら育てるとは想定しにくいからだ。また、ある程度まとまった額の金銭を、子供が自力かつ定期的に手に入れるのは非常に困難である。子供たちは基本的に、金銭やそれによって手に入

れた物質、機会を、親から〈与えられる〉だけの存在にすぎない。さらに言えば、各家庭の文化資本の差は認められるとしても、ひとつの家庭に焦点を当てたとき、その家庭の子供ごとに親が差をつけて養育することは考えにくい。

このように、家庭内で親から子へ継承される文化資本は同質的なものである、という見解が一般的だが、ほぼ同一の属性と歴史を持つ姉弟の場合、その見解は正しくあてはめられるのだろうか。二人の金銭感覚の違いを決定づける要因となったのは、すべて遺伝的形質によるものだと考えにくい。やはり、文化資本の獲得量と質、機会、継承のプロセスに違いがある可能性が高いのではないだろうか。さらに言えば、姉弟のそれぞれの金銭感覚は、同じ性別の親から、または親と子供の紐帯や付き合いの濃さや頻度、時間の長さに影響されるのではないか。そこで、A子とB男の、両親との付き合い方の性質の違いを検証するために、B男とC夫人に対するインタビュー、およびA家庭への参与観察を次章で行う。

2.2 研究方法

この章では、姉弟の金銭感覚の違いが、親から与えられる文化資本の違いや付き合い方の濃さと、どのように関連しているのかを明らかにするため、C夫人とB男へのインタビュー、および筆者によるA家族への参与観察としてのいくつかのエピソードに触れていく。

(1) 母親へのインタビューと母娘の関係

まず、C夫人へのインタビューにおいて、当初、C夫人はA子とB男についての文化資本—どんなものを、どのような形で、どんな機会に与えていたのかという事柄—に差をつけたことはないと言っていた。たとえば、A子に3つの習い事をさせていたのだから、B男にも同数の何らかの習い事をさせる、ということや、小遣いやお年玉の額や値上げのペース、食事や服装など、生活面に関しての差異を、母親が意識的につけるはずがない、というのが彼女の主張である。しかし、話を聞いていくにつれて、C夫人は次のようなことを語りだした。

お姉ちゃん（A子に対する呼び名）は、昔からとにかくソツのない子供で、私たち夫婦の、比較的良い部分を持って行ったのだとずっと考えていたわ。というのも、私が言いつけたお手伝いはいつも文句を言わずに手早く片付けてくれるし、友達とも仲良くできて、学校でのトラブルもなく、成績も学習塾に行かせていなくても常に良い子どもだったの。とにかく聞き分けがよく、手のかからなかったことが記憶に残っていて…、だから、基本的にお姉ちゃんは放任主義よろしく、私やお父さんが口うるさく躰をするとか、そういうことは記憶になかった。

その一方で、お兄ちゃん（Bに対する呼び名）は小さい時には、とにかくすぐ泣いてしまう子どもで、お姉ちゃんに、おままごとだとか、人形遊びだか、とにかくいろんな

な遊びに連れまわされている分には安心だったんだけど、小学校に入ってすぐの頃には軽いいじめ…外遊びに加えてもらえないとか、そんなようなこともされたことがあって、少し心配なところが多い子だった。

この、もともとの性格の差を考慮したうえで、さらに C 夫人は、夫婦の持つ価値観について次のように述べている。

私とお父さん（D 氏を指す）の間では、もともと女ってというのは、いくら最近になって働く人が増えているといったって、結局は家庭に入って、母親として子育てしたり、妻として夫を支えて家庭を守ることが一番大事だっていう考えがあった。だから、女にとっては「学問」だとか「学歴」ってというのは、基本的に男よりも出来すぎるのはよくない…男ってというのは立てるものだと思っていたし、そういう夫婦の暗黙の了解みたいなのもあった。お姉ちゃんが好きに勉強する分には何も文句とかはなかったし、むしろしっかりした子どもでよかったとさえ思っていた。お父さんのほうも、お姉ちゃんの学校の成績とかには、お兄ちゃんの成績ほど熱心ではなかったかもしれないね。お父さんは昔の考えの人だから、男は馬鹿じゃ生きていけないって言って、お兄ちゃんには算数ドリルとかやらせたり、体を強くするために空手を習わせたりいろいろさせていたけど。

この、熱意の差の要因は、A 子が自力で学業に励み、特にトラブルを起こさなかった安心感と、B 男の精神的な頼りなさももちろん理由として挙げられる。しかし、最も大きな要因は、夫である A 氏が「頭の悪い男は苦勞する」「女は家庭、男は外」「常に心技体を鍛えるよう努めるべき」というような、「人は、男は、女は、〇〇であらねばならない」という価値観やこだわりをいくつも持っていたことにも関係しているかもしれない。

教育の違いについて、たとえば、D 氏は夏休みや冬休みといった、大きな休暇の時には、B 男にだけ難易度の高い問題集を買い与えて休み中にやり遂げることを課題として出していた。また、D 氏は地域住民で行うイベントや市が開催するシティマラソンといったイベントにも B 男を積極的に参加させていた。A 子は基本的に先ほども言ったように放任主義で育てていたのも、本人が興味を持ったこと、最低限覚えておいて損はないだろうと思われる知識の習得の機会を与えるようにしていた。

さらに、C 夫人は、このように、弟が父親とともにいろいろな行事や課題を与えられている間、姉は母親と一緒に過ごす時間が必然的に増えていったのだと付け加えた。

（2）一卵性母娘としての母子関係

上記のインタビューから、C 夫人と A 子の付き合い方は、D 氏が B 男との付き合いに熱心になるほど、濃く、親密になっていった。もともとの放任主義な育て方から、A 子は母親

である C 夫人に対して、「親」と「子」という上下関係の意識がだんだんと希薄になっていったという。C 夫人も、飄々とした A 子の性格への気安さから、自分自身の親せきや親子関係の愚痴や、日常生活の些細な相談を逐一 A 子にするようになる。母子は、厳格で隙のない父親の目が弟である B 男の教育に向けられている間に、一般に一卵性母娘と言われるような、蜜月の関係を築いていった。

この〈一卵性母娘〉という言葉に対して、藤田ミナと岡本裕子は次のように特徴づけている。

「友達母娘」などの言葉で示されるように、…母親と娘は同性であるため、親子間の心理的距離が近く、親密な関係を気付くといわれてきた。…母親と娘の緊密な関係は姉妹のような相互依存的な関係のようであるが、両者の人格発達や自立を阻むようなネガティブな面をもった関係であるといわれている。…母親は…娘の人生に介入したいという希望、また、娘を理解者とする気持ち、自分とは一心同体のものであるという気持ち、の全てにおいて息子よりも娘に対してのほうが高いことを示唆し、娘と息子では母親にとっての位置づけが異なる。(藤田・岡本 2009 : 122)

彼女たちは、A 子が学校から帰ってくればおしゃべりに花を咲かせ、日用品の買い物にスーパーやドラッグ・ストアへ行くにも、飼い犬の散歩に行くにも、どこかへ行くときには共に行動をすることが多くなった。また、中学に上がるころから、定期テストが終わるたびに C 夫人は A 子に「ねぎらい」の意味を込めて、百貨店やショッピングモールなどへ買い物に連れ出すことが多くなった。彼女たちが A 子の学校のテスト後などに行うこのような買い物の習慣化し、A 子が大学に入学し親元を離れて生活をはじめまで、定期テストや模試、文化祭、クリスマス、盆のセール期間といった、さまざまなきっかけで行われていた。この買い物一回に使われる額は、一度に 3~8 万円の間を推移していた。C 夫人の資金源は、C 夫人自身の実家からのポケットマネーの一部であった。このことが、財布の紐が固い D 氏の目を逃れ、C 夫人と A 子はこの買い物の習慣を継続することを可能にしていた。

この買い物は、A 子への学業その他へのねぎらいという名目のもとで行われた。しかし、根本には、もともと金銭感覚がゆるく結婚前までモノの値段を見ずに育ってきた C 夫人が持つ、金銭管理に厳しい D 氏から受けるストレス発散としての役割も担っていたため、C 夫人の浪費の癖は A 子へと脈々と継承されていったのである。また、母娘の関係が、このような浪費の継承のスパイラルから抜け出せなくなった要因について、C 夫人は次のようにも語っている。

お姉ちゃんは高校の 2 年生くらいにダイエットを始めたらしくて、それが転じて摂食障害を起こしてしまった。母親としては、はじめはお姉ちゃんの厳しい食事管理に驚いたけど、本来お姉ちゃんはとてもまじめなでしっかりした子だと思っていたから、

食生活について自分なりに何か考えがあるのかなと、あまりとやかく言わずに好きなようにさせていた。

けれど、もともとそんなに太っているわけではなかったのに、さらに体重が落ちていって、38キロくらいなった頃くらいから、だんだんと精神的に不安定になっていったのが見て取れたわ。一時は高校をさぼりがちになってしまったり、なんだか悪い方向に娘の生活が転がり始めていたことに、その時やっと気が付いたのよね。それで、薄らあった危機感が決定的になったのが、お姉ちゃんが学校から帰ってきてぼそっと言った「階段の上り下りで息切れして苦しい」という発言だった。この言葉を聞いて、これはまずい、この娘は死んでしまうとやっと認識したのを覚えている。なんとかその後、摂食障害も克服して、体重も元に戻ったし、幸い学校生活も通常のものになったのだけど、私はこの時から、娘は自分が思っていたよりも実は何倍も芯が脆い子どもであると気付いた。それと同時に、摂食障害という心の病には、きっと本人にも大きなストレスがかかっていたのだろうから、これ以上娘に余分なストレスをかけたら、娘は精神を壊してしまうのではないかと恐怖も感じていた。

この事件から、私はお姉ちゃんにはできるだけ生活面でのストレスをかけさせないようにしようと思ったの。お姉ちゃんが行きたいといった学習塾や家庭教師、着たいといった服、靴、欲しいといった鞆、遊びに行きたいといったイベントには、もう自分の持ちうるお金には糸目は付けずに、すべて与えなければいけないのだと感じた。この子はしっかりしてるから大丈夫だと、私がタカをくくっていた時期が長すぎたこともよくなかった。だから、母親として、娘が望むもので、それがお金で解決できるものは、幸い動かせるお金も潤沢にあったことから全て叶えることにしたのよ。あのとき中学生だったお兄ちゃんは、自分から何か欲しいといってくることもなかったし…娘が大変な時期だったから、あの時はお兄ちゃんの希望の学習塾に入れてやるぐらいしか気を回せなかった。それに、いつの間にかお兄ちゃんは、私たちのお金の使い方を反面教師にしたのかはわからないけど、お父さんとそっくりの考え方とか、行動力を持った人間になっていて、小さいころとは比べ物にならないくらい全然手のかからい子になっていた。

子供たちが幼いころは、頼りなくて心配事が多いのはお兄ちゃんのほうだったのに、この件を機に、目を離せない子どもは実はお姉ちゃんのほうだったという認識になった。お兄ちゃんのほうは、いつの間にか、私が娘と親密な関係を築いているうちに、お父さんそっくりの、寡黙で意志の強い大人に成長していたのだから、人生とは不思議ものだ。

このように、A子が高校時代に引き起こした摂食障害と、それを契機として起こった精神的な揺らぎを通して、C夫人はA子に対してますます甘やかしの度合いを高め、母娘は「一卵性母娘」では片づけられないほどの、重度の共依存関係を築いていった。

また、A子が摂食障害を起こしていた頃、C夫人も、両親の介護や雑務に追われ、A子に毎日愚痴の相手をしてもらっていた。身内、それも価値観が非常に似た母娘は、ざっくばらんにある程度何を言っても許される関係であったので、とても気やすかったのだ。そして、C夫人は、介護や税務、遺産関係の処理に奔走していたことから、A子にA家庭の家事の半分ほどを任せていた。その「お手伝い」に対する報酬として、C夫人は家事の内容に見合わないくらいの破格の小遣い、もしくは前述のような「予算を決めない買い物」にA子をたびたび連れて行った。A子の方も、そのようなC夫人の振る舞いに対して、「貰えるものは貰っておいて損はしない」というスタンスで、それを当たり前のように享受していた。こうして、A子とのC夫人の付き合い方は、濃密かつ歪で、依存的なものになっていた。そして、彼女らが相互依存関係に陥れば陥るほど、C夫人とB男の関係は、友好的ではあるがドライなものになっていった。ではB男は、A子と依存関係にあったC夫人、そして、父親であるD氏とどのような関係を築いていったのだろうか。

(3) 弟の金銭感覚と父親との関係

C夫人とA子は、小学校から高校卒業までに濃密で歪な蜜月関係を築いてきた。では、その間、B男は自身の父親と母親からどのように育てられていったのだろうか。B男は、まず自分の金銭感覚に関してこのような言及をしている。

姉ちゃん(A子への呼び名)は、僕の金銭感覚をとっても厳格なものだと思ってはいるようだけど、実際は少し違っていると思う。というのも、僕にだって、人並み物欲…たとえば、友達の間で話題になっているゲーム機がほしいとか、お菓子を買って食べたい…とかいうような欲求は、ちゃんと持ち合わせているからね。姉ちゃんと僕の金銭感覚の決定的な違いってというのは、おそらく、実際になにかを買うまでの過程だと考えたほうがいいんじゃないかと思う。

たとえば、僕と姉ちゃんの目の前に、大きさがほぼ同じの、100円の普通のシュークリームEと150円のちょっと皮がサクサクしたシュークリームFがあるとすると。おそらく姉ちゃんは、「50円の差しかないのならFのほうを買おう。きっとそっちなほうがおいしいんだし。」と考えてFを買うんだろうね。けど、姉ちゃんの買う動機とはちょっと違う視点でシュークリームを見るんだよ。二つのシュークリームを目にしたときに、まず、50円の差に含まれる〈価値〉を、姉ちゃんよりも厳密に考えるんだ。どういうことかっていうと、50円分の価値がFに本当に詰まっているのかってこと。それぞれのシュークリームの重さとか、カロリーや栄養価はおそらく、それほど変わらない。味なんてものは、そりゃFのほうがおいしい可能性が高いけど、腹に入れてしまえば同じことでしょう。

味覚って、僕にとってはそんなに重要ではなくて、そういった風に思案すると、僕にとって、やっぱりFは50円分の魅力は持ち合わせていないということになる。もし、

FがEよりも1.5倍以上大きい商品だったりすれば、Fを買うかもしれないけど…。お腹がすいていたらね。要するに、僕は一瞬感じるだけですぐ終わってしまうような嗜好や買い物に魅力を感じないんだ。たぶんこれは、お父さんもそうするだろうね。いや、むしろ、お父さんはケチだからシュークリームを買わない可能性のほうが高いよね。

B男にとって、より価値のある商品は、味や品質の良いものではなく、そこに含まれる成分、使い勝手、そしてコストパフォーマンスが優れているものなのである。味や品質といった個人の好みに左右される事柄は信用ならないものなのである。

この思考の傾向は、D氏の日常的な言動からもうかがい知ることができる。たとえばある日、C夫人が、パン屋で一個120円の菓子パンを二個、子供たちのおやつに買ってきただけであった。すると、D氏はC夫人に、「一個120円のパンを二つ買うなら食パンを一斤購入したほうが長持ちするじゃないか、無駄遣いするな」と注意したのである。このD氏の怒りは、A家庭が困窮しているから来るものではない。D氏は、同じ値段で同じ原材料を使っているのなら、小さくてすぐなくなってしまう菓子パンよりも大きくて長く食べられる食パンのほうが、コストパフォーマンスが高いと言いたいのである。そのD氏の発言を聞いて、A子はC夫人をかばい、当のB男はその様子を黙って傍観していた。B男は、菓子パンのほうが美味しいと思いつつも、D氏の考え方を少なからず理解し、賛同する意味で彼に言い返さなかったという。

B男の思考方法がD氏から少なからず影響を受けていることについて、彼は次のようなことにも言及している。

姉ちゃんが昔からお母さんとべったりくっついていて、それが、姉ちゃんが高校生になったときから一層ひどくなっていったのは、なんとなくわかっていた。けど、べつにお母さんと姉ちゃんの仲が良くっても、疎外感を感じるってことはなかったし、好きにつるんでればいいと思っていた。あと、お母さんが姉ちゃんに無駄遣いをすぐくするから、姉ちゃんの金銭感覚がマヒしてきているのも、大丈夫かとは思ったけど、注意しようとかは思わなかった。好きにしてくれて感じてね。内心ちょっとはあきれていたけど、それでお母さんと姉ちゃんが満足しているなら僕は口を出す権利はないでしょう。だって、お母さんが姉ちゃんに使っているお金は、僕のお金じゃなくて、お母さん自身のお金なんだから。

けど、ここだけの話、お父さんは僕によく、姉ちゃんの将来について心配だと言っていた。たとえば、お母さんが姉ちゃんを甘やかすのも「贅沢に育てすぎだ、嫁に行ったら相手が苦勞するかもしれない」とか言って、よく僕に愚痴を言っていたから。僕も確かに大丈夫かと思っていたけど、お母さんと姉ちゃんを反面教師にして、自分は無駄遣いしまいとも考えていたんだよ。お父さんは、お母さんが姉ちゃんの望むも

のをいっぱい買い与えるのは不満だったみたいだけど、その資金源はおじいちゃん（母の父親を指す）で、自分が関与できないお金のことだから、お母さんに強くものが言えなかったのだろうと思う。

話は変わるけど、お父さんは僕に、食事中とか、二人きりで居間にいるときなんか、経済とか環境問題だとか、新聞の記事とか、いろいろなことについて議論をよく吹っかけてきた。中学生の時なんかは僕もまだ考え足らずだったから、たいていあいっつ（父親を指していると思われる）に言い負かされるし、だんだん口喧嘩みたいになるから、あまり好きではなかった。けど、黙って無視を決め込むというのは、なんだかお父さんに負けた感じがするし、それにお父さんに舐められたくないっていう気持ちはかなり強かったから、よく混乱しつつも議論に応戦していたのを覚えている。今でも帰省するたびに、その時事とか、歴史問題とか、いろいろことをお父さんは吹っかけてくる。で、そんなときは、だいたいお母さんと姉ちゃんは、適当に受け流したり、僕とお父さんの会話を傍観しているか、なんだよね。

まあ、僕も長年くそ真面目にお父さんの議論の相手をしているうちに、いつの間にかお父さんと似たような思考回路になってしまったけれど…。お父さんの考えとか、意見とかは、だいたい正論だからすごく腹が立つ。けど、その分いつも合理的だったから、自分としてはお父さんとの会話で学ぶことも多かったと、今になっては思うよ。

それで、そんな関係から、僕はお父さんに、学歴、思考力、将来の収入とか、あらゆる面で負けたくないというライバル心を燃やすようになった。たとえば金銭面でなら、僕が無駄遣いとか、ものを駄々草に扱ったことが奴の耳に入れば、きっと僕はお母さんがいつもやられているように、父に嫌味を言われて、そしてたしなめられるだろう。そうされると、なんだか自分がお父さんよりも格下で劣っているように感じてきて、それは僕にとっては格別に屈辱的で我慢のならないことなんだ。だから僕はいつも無駄遣いや考えなしの浪費はしないようにしているし、それが、お父さんと似たような嗜好とか行動になっているんだろうとも思う。

このように、母 C 夫人と娘 A 子が親密な付き合いをする傍ら、父親 D 氏と息子 B 男もまた、「甘やかし」とは違う方向で断続的なスキンシップを図っていた。また、B 男が D 氏にたしなめられまいと反発して起こす行動や発言の、根幹となっている思考パターンの大部分は、D 氏の発言や考え方に大きく影響を受けているようである。そして、これまでのインタビューを振り返ると、好意的か、反発的かの差はあれ、姉は母親から、弟は父親から、それぞれの価値観や行動パターンを継承しているようである。

また、D 氏の金銭観はとてもシビアで慎重である。D 氏はいくつもの「人間とは〇〇であらねばならない」というような理想像を持っており、その生活には、あまり遊びや隙がみられない。C 夫人は外出すると、疲れていてもいなくても二時間に一回くらいの頻度で喫茶店に入りたがるが、D 氏は出先で足を休めたいときに喫茶店は利用しない。公園のベン

チで、せいぜい自販機で買った飲み物を飲むくらいである。喫茶店の場所代としてのコーヒーの値段は、D氏にとって非常に無駄で、無価値なのだ。またD氏は、夕食後にC夫人がお菓子をつまんでいたことに対して非常に怒ったことがあった。彼の言い分としては、夕食ですでに十分な栄養をとったのに、さらにお菓子をつまむというのはただの無駄食い・無駄金であり、もったいないことで、ひいては節度なくだらしのない行為なのだ。これらの例のように、D氏の金銭感覚はとてもしんどく、とにかく無駄なことを嫌う性質を持っている。A氏にとって、金銭面での理想像は「日々節制して、つねに合理的な消費行動を行なう」ことなのである。

日常生活において、D氏にとって無駄だと思われる行為をC夫人が犯したとき、B男はC夫人をかばう発言をすることがある。しかし、彼の行なうC夫人の消費行動への擁護は、彼女の緩い金銭感覚を肯定しているからというわけではなく、ただ単に父親であるD氏への反抗の一部なのである。そして、B男はC夫人の緩い金銭感覚を黙認しつつ、その一方で自分は父親になじられまいと、C夫人を反面教師として、自分自身の消費行動を合理的で隙のないものにしていく。しかし、それは皮肉にも、ライバル心を抱く父親D氏の模倣となっているようだ。

第三章 考察

前章では、C夫人とB男のインタビュー、そして母娘、父息子それぞれの関係性に関するエピソードを詳しく見てきた。通常、家族内では、共通するとある一つの文化資本を親と子供で共有し継承する。しかし、A家族内では、母から娘と息子に、父から息子と娘に、それぞれ与える文化資本と子供への接し方に大きな違いがみられた。図2は、A家庭における親から子供への働きかけの種類と強さ、彼らの関係性を簡単にまとめたものである。また、表2は母と娘、父と息子のそれぞれに共通する消費行動と、それを対比させたものである。

表 2 母娘と父息子の消費行動および傾向

	母と娘	父と息子
消費行動	浪費	貯蓄
消費志向	嗜好品、装飾品など	日常生活に必要な最低限のもの
消費傾向	自分の欲望に忠実	理性的、我慢
使い方の特徴	衝動的な買い物が多い 使いたいだけ使う	購入に長考と分析を要する 限度額を設定して使う
金銭への有効感覚	強い	普通ないし懐疑的

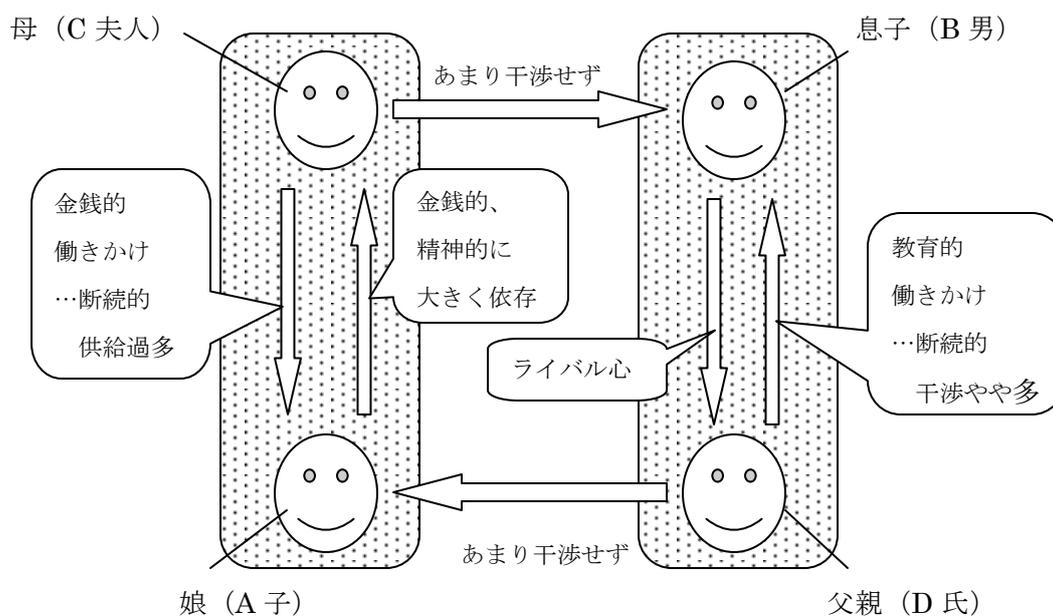


図 2 筆者家庭の金銭・教育の働きかけ

3.1 母娘における消費傾向の再生産プロセス

調査結果をふまえると、まず、C夫人からA子には、中学生という多感な時期から現在まで、断続的に金銭面での過剰な働きかけがなされてきた。とくに母娘の金銭的働きかけで特徴的であるのは、その働きかけがA子への際限のない甘やかしである点、そして、彼女に供給されてきた多くの投資が、オシャレやレジャーといった娯乐的で消費的な側面を持つ者ばかりである点といえる。A子は、思春期頃に、このように自分の欲求がすべてかな

えられる状態におかれ、そして、年齢不相応ともとれる金銭の使い方を、母親を通して学んできた。

A子の中で、お金があれば自分のほしいものがいつでも気軽に手に入れられるという経験は、自らの身体的歴史―「消費行動のハビトゥス」として彼女の中に獲得されていった。C夫人との関係を通して蓄積された「行動的かつ浪費的な消費行動のハビトゥス」は、A子の持つ、浪費に意欲的で、節約や我慢を嫌うような金銭感覚につながっていった。

また、A子はC夫人から、多額の金銭や嗜好品、雑貨の数々を与えられ育ってきた。デューゼンベリーによる消費行動の習慣持続仮説の視点でいえば、子供としてまだ独自の収入源を持たないA子への、長年に渡る文化資本（所得）の供給過多は、現在の彼女の持つ高い生活水準へ欲求、金銭への絶大な有効感覚、そして活発な消費意欲の要因となったともいえるだろう。

3.2 父息子における金銭観の継承プロセス

インタビューやA家庭に関するエピソードから、母と娘を挟まない議論や会話を通して、B男に対しては幼いころから、父親であるD氏からの絶え間ない教育的働きかけが行なわれてきたことが分かる。B男はD氏から、知性や学力を伸ばすための文化資本―たとえば小学生の時には算数ドリルや子供用の科学百科事典といった類の書籍―や、学問や時事に対する議論の機会、母親であるC夫人の消費行動への愚痴や戒めといったものを多く与えられていた。D氏は、A子に対してはこのような熱心な教育的な働きかけはせず、C夫人と同じ価値観を継承しつつあるA子に母親の消費行動への否定的な見解を口にするのはなかった。

また、B男のとり行動には、D氏に認められたい、見下されたくないという反抗期特有の父親への対抗意識が大きな影響を及ぼしている。これはA子の消費行動のハビトゥスの蓄積プロセスと大きく違う点でもある。B男自身も、D氏に対してライバル心は反発を抱えつつ、家族の規範から逸脱することはなかった。B男は、D氏の意にそぐわない行動を起こして反発するのではなく、あえてD氏と同じカテゴリーで勝負し、打ち負かす道を選んだのではないだろうか。その結果としてB男は、金銭感覚も含め、あらゆる分野において、D氏と同じような行動規範を習得していったと考えられる。父親であるD氏に認められ、たしなめられないようにするには、D氏の持つ価値観を模倣するのが一番手っ取り早いのである。B男は、無駄遣いや合理的でない消費行動をとることが、C夫人のようにD氏に否定され、格下の扱いされることを理解し、D氏の満足するような消費態度を身につけたのである。

さらに言えば、A子がC夫人から熱心に嗜好品や娯楽的な投資長年に渡り与えられたため、相対的にB男の方は、C夫人からA子が受けたような甘やかしを受けることはほとんどなかった。むしろ、D氏の持つシビアな金銭感覚を受容する中で、母娘の活発な消費行動には否定的な見解を持つようになったようである。

3.3 総括

以上で述べてきたように、母親と父親の持つ対照的な消費行動は、それぞれ、母親から娘に、父親から息子に受け継がれていったことが分かる。このプロセスについて、次のような特徴が挙げられる。まず一つ目に、二人の子供たちは、各々対照的な文化資本および、金銭による投資のされ方によって、これまた対照的な金銭感覚を身につけていった。A 家庭内において、二種類の文化資本と、子どもに対するお金の使い方が、同時に存在していたということである。二つ目に、その関係が友好的か否かに関わらず、より強い精神的つながりを持つ親子—A 家庭の場合は C 夫人と A 子、D 氏と B 男の間で金銭感覚の継承が起っていた。そして三つ目に、子供は、親からより豊か高い水準の生活や贅沢を与えられれば与えられるほど、自分自身の持つ消費行動のハビトゥスをより貪欲で活発なものに昇華させ、現在の金銭観の根幹としている側面もある。

筆者は序章において、ほぼ同じ属性を持って生まれた姉弟の間の金銭の有効観や使用方法に差は、個人の遺伝的形質による性格のほか、1)両親との幼いころからの付き合い方や 2)養育にかけられてきたお金の質や量、種類、そして 3)母親と父親、それぞれとの紐帯の強弱に起因するのではないかと仮説を立てた。結果として、子どもの消費行動のハビトゥスの違いを生み出すものとして、これらの要素は複雑に絡み合いながら影響を及ぼしており、どれか一つでも欠けることはできない重要な要因であることが推察できる。

また、親と子どもの付き合いとその紐帯に関して、さらに付け加えるとすれば、次のようなことが言えるだろう。C 夫人と A 子のような友好的で親密な関係の中での消費行動の継承と同様に、B 男と D 氏のような決して友好的とはいえない—むしろその関係性に葛藤と反発といったマイナスの要素が潜んでいる関係性の中でも、親と子どもの価値観のすり合わせが頻繁に起こる環境ならば、消費行動のハビトゥスはその親子の間で継承されていく。父親である D 氏と娘の A 子、そして母親である C 夫人と息子の B 男、二つのつながりは決して悪くないものであったが、文化資本の移動と、会話や行動を共にする頻度、親から子供への金銭的投資の額は、母娘、父息子の組み合わせよりも少なかった。このことから、親子間での消費行動の継承においては、彼らの関係が良好かどうかというよりも、そのつながり方がより深いかどうかという事柄が、より影響を与える要因ともいえるかもしれない。

そしてさらに特筆すべきことは、A 家庭内において、C 夫人から A 子への価値観の移動と、D 氏から B 男への移動という親子間の消費行動の二本柱の継承ルートが存在していたということである。それは、家庭内で一つの文化資本が親から子供へと受け継がれていく、というブルデューの文化資本の再生産サイクルの前提に、実際の家庭内での文化資本継承プロセスが、必ずしも当てはまらないことを示している。

終章 おわりに

筆者の論題として掲げた「子どもの金銭感覚と消費行動は、両親との幼いころからの付き合い方や養育にかけられてきたお金の質や量、種類、そして母親と父親それぞれとの紐帯の強弱に起因する」という仮説に対する答えとして、本論での検証結果とそこから導かれる考察は、完全なものとは言いがたい。なぜならば、本論で扱った研究対象は、あくまでも「A 家庭の中で起こった相互作用の差」であって、単純に一つの家族のモデルケースにすぎないからである。複数の家庭の中でもこの仮説が有効なものであるかどうかの検証は、今後の研究に期待したいところである。

また、A 子が C 夫人から金銭感覚の受け継いでいく中で、嗜好品、装飾品、レジャー、多額のお小遣いとしての現金…というような、A 子の刹那的・娯乐的な欲求を満たすための投資や振る舞いを経て、浪費的な消費行動としてのハビトゥスは A 子の中に蓄積されていた。A 夫人の物価に対する無頓着さや金銭観の緩さは、金銭感覚のセンスという身体的文化資本として、親密な付き合い方の中で A 子の中に見事に再生産されていったといえる。

一方で、D 氏と B 男の間でも、B 男は、母娘を挟まない様々な議論を通して父親の持つ所性を理解し、D 氏と同じ土俵に立つための意識的な努力を思春期以降に断続的に続けた。その努力とは、たとえば、「父親が無駄遣いを嫌うならば、自分も絶対に無駄遣いをしないようにする」といったような、D 氏から文句やたしなめを受けないための心掛けが例として挙げられる。この結果 B 男の金銭感覚や善悪の価値観、ものごとの良し悪しといった、あらゆる価値観は、D 氏のそれと似たような性質のそれになっていった。D 氏の物価に対する執着心やシビアで合理的な金銭感覚といった消費行動のハビトゥスは、D 氏その人による教育的な側面での働きかけと、それに対する B 男自身の内面への意識的なコピー作業によって再生産されていった。

親からのさまざまな働きかけを、子どもは受容し、時に拒絶しながら自分の身体化された歴史として自身の中に蓄積していくが、その中で、寺本圭子は「たとえマナーや振る舞いだけが仮に身に付いたとしても、それを応用する機会や場、人脈などが伴わない限り、本来のハビトゥス習得には至らない」（2011）と述べている。せっかく手に入れた消費行動としてのハビトゥスも、それを活用する舞台—たとえば、行為者の稼ぎだす所得が、培ってきた金銭感覚と見合っているかどうか、といった事柄が上手い具合に整わないかぎり、誤ったハビトゥスの習得として、時に身を滅ぼす可能性もあるのである。買い物依存症の患者の病状のように、得られる所得に対して分不相応で浪費的な消費行動を会得してしまった行為者は、その消費行動によって身を持ち崩す危険性もある。

子どもにとって最も基本的かつ身近な結合である「家族」の、教育的機能への期待はとても大きい。親世代が自身の持つ機能と影響力を理解し、正しく作用させることが、子ども世代の正常な慣習行動の獲得につながっていくといえるだろう。子どもを育てる場としてかつて有効であった地域社会とのつながりが今日希薄なものになりつつあるなかで、家

庭での親と子どもの付き合い方は、新たな金銭教育の機会としてますますその重要性を増していこう。

[参考・引用文献]

- Duesenberry, J. S., 1949, *Income, Saving and The Theory of Consumer Behavior*. (= 1955, 大熊一郎訳『所得・貯蓄・消費者行動の理論』巖松堂出版)
- Bourdieu, P & Loic **J. D.** Wacquant, 1992, *Réponses : pour une anthropologie reflexive*. (=2007, 水島和則訳『リフレクシブ・ソシオロジーへの招待 ―ブルデュー、社会学を語る』藤原書店)
- Bourdieu, P & Jean-Claude, P, 1970, *La Reproduction: élément pour une theorie du systeme d'enseignement*.(=1991, 宮島喬訳『再生産——教育・社会・文化』藤原書店)
- Bourdieu, P, 1979, *La distinction, critique Sociale du jugement*. (=1990, 石井洋二郎訳『ディスタクシオン——社会的判断力批判 (1・2)』藤原書店)
- , 2000, *Les structures sociales de l'economie* (=2006, 山田鋭夫・渡辺順子訳『住宅市場の社会経済学』藤原書店)
- , 1977, *Algérie 60: Structures économiques et structures temporelles*. (=1993, 原山哲訳『資本主義のハビトゥス——アルジェリアの矛盾』藤原書店)
- 岡野雅子, 1992, 「子供の金銭感覚の発達 (第1報) 消費者教育のための基礎研究」, 『日本家政学会誌』(43), 745-758
- 竹内洋, 1999, 『日本の近代第12巻 学歴貴族の栄光と挫折』中央公論新社
- 寺本圭子, 2011, 「ハビトゥス習得の身体化とはどのようなものか ～現代日本における階級上昇を背景として～」『21世紀社会デザイン研究 2011』10: 149-159
- 藤田ミナ・岡本裕子, 2009, 「青年期における母娘関係とアイデンティティとの関連」『広島大学大学院心理臨床教育研究センター 紀要 第8巻 2009』8: 122